# 平成２０年度　学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立金沢辰巳丘高等学校

| 重点目標 | 具体的取組 | 実現状況の達成度判断基準 | 集計結果 | 分析（成果と課題）および次年度の扱い（改善策等） |
|---|---|---|---|---|
| 1　学習指導の充実<br>（個に応じた指導により、基礎基本の定着と学力の増進を図るとともに、チャレンジ精神を涵養しながら各コースの特性を活かした進路指導の充実を図る） | **授業の改善と、基礎学力の充実**<br>①　教材を工夫し、わかりやすい丁寧な授業を実施する。 | 単元終了後の感想として<br>A　興味関心が高まり、よく理解できた。<br>B　興味関心が高まり、ある程度理解できた。<br>C　興味関心は持てなかったが、ある程度は理解できた。<br>D　興味関心が持てず理解も不充分であった。 | 年度末に実施した生徒へのアンケートでは、Ａ＋Ｂの割合が７０％であった。 | 年間２回の相互授業公開や各教科毎の研究授業を昨年より多く実施したが、生徒の満足度は昨年より低いものとなった。<br>引き続き教員の授業改善の在り方を検討しなければならないが、一方で生徒の家庭学習時間の不足も顕著であり、毎日家庭学習を行う習慣付けが大きな課題である。（毎日家庭学習を行う生徒は 21.2 %） |
| | ②　前・後期、各１回校内公開授業週間を設け、研究授業・研究協議会を充実する。また、研究授業における協議内容を全職員に報告する。 | 授業改善について<br>A　他の教員の授業を参観し、教科会等で授業改善への研究協議が月１回以上行われている。<br>B　他の教員の授業を参観し、教科会等で授業改善への研究協議が３ヶ月に１回程度は行われている。<br>C　他の教員の授業は参観したが、教科会等で授業改善への研究協議は行われなかった。<br>D　他の教員の授業を参観することもなく、授業改善への取組が教科としてはなされなかった。 | 年度末に実施した教員へのアンケートでは、Ａ＋Ｂが５２％であった。 | 目標としていた６０％に達することは出来ず、昨年よりも後退した。<br>教科指導等研究会や１０年経験者研修に関連した授業研究会は、例年より多く実施することは出来、一つ一つの内容も密度の濃いものであったと思うが、全職員への結果の報告という点で徹底がなされず､他教科への還元が不十分であった。<br>来年度にむけて、報告書の形式を整えるなど、せっかくの授業研究の成果を、多くの職員が共有できるようにしなければならない。 |
| | ③　家庭学習の定着をねらいとする効果的な週末課題を与え、提出状況を評価に加味する。 | 課題の提出率が<br>A　８０％以上である。　B　６０％以上である。<br>C　４０％以上である。　D　４０％未満である。 | 年度末に実施した生徒へのアンケートでは、６４％であった。 | 昨年よりは上昇しているが、目標の８０％には大きく及ばなかった。<br>毎日の家庭学習の習慣付けが出来れば、数値は上昇するものと思う。各学年ごとに課題の内容も含めて、検討してもらいたい。 |
| | ④　個に応じたきめ細かな指導により、成績上位層の学力の増進を図る。 | 成績上位層が年度当初より<br>A　かなり増加した。　B　やや増加した。<br>C　ほとんど変わらなかった。D　逆に減少した。 | 国･数･英では増加しているが、逆に地公･理では減少している。 | 個に応じた指導を充実させ、成績上位層の学力を伸ばすという目標は、充分には達成できなかった。<br>また、判断基準の設定がわかりにくいものであったので、来年度はもう少し具体的な基準を設定し、上位層を伸ばす方策を様々に試みたい。 |
| | **進路指導体制の確立と進路目標の早期の設定**<br>⑤　小論文委員会を設置し、チャレンジ精神を培えるよう３年間を見通した小論文指導を行う。 | ［生徒］本校における小論文指導に<br>A　意欲的に取り組むことが出来た。<br>B　まあまあ意欲的に取り組むことが出来た。<br>C　あまり意欲的に取り組むことが出来なかった。<br>D　意欲的に取り組むことが出来なかった。<br>［教師］小論文指導の研修会や指導力向上のための情報交換会などに参加したことが<br>A　大いに参考になった。<br>B　まあまあ参考になった。<br>C　あまり参考にならなかった。<br>D　参考にならなかった。 | 年度末に実施した生徒へのアンケートでは、Ａ＋Ｂの割合が８５％であった。<br><br>年度末に実施した教員へのアンケートでは、Ａ＋Ｂの割合が７６％であった。 | １・２年生と３年生では、小論文のとらえ方に差があり、当然のことながら３年生のほうが積極的である。<br><br>本校の進路指導にとって、推薦入試による合格がかなりの部分を占めるので、そのための小論文指導は大変重要で、生命線とも言えるものである。昨年も問題となったが、全職員一丸となっての協力体制が十分にとれず、一部に添削指導が片寄ってしまった。 |
| | ⑥　キャリア・カウンセリング及びインターンシップを推進させるために面接週間を設け、キャリア教育の充実を図る。 | 担任との面談を通して，自己の進路についてより具体的な考えを持つことができたと考える生徒が<br>A　８０％以上である。<br>B　６０％以上８０％未満である。<br>C　４０％以上６０％未満である。<br>D　４０％未満である。 | 年度末に実施した生徒へのアンケートでは，７０％。 | 年間２回の面接週間などを活用して、クラス担任は生徒との個別面談を精力的に実施している。また、総合的な学習の時間においてもキャリア教育を実施してきている。その結果、かなりの生徒が目的意識を持ち目標を掲げることが出来るようになって来ている。<br>各学年で面談を、そのあり方について相談しながら、効果的に推し進めてもらいたい。 |
| | ⑦　大学との連携を図り、進路意識を高める。 | 高大連携により、より専門的な学問領域について、興味・関心を持てたか。<br>A　大変、興味・関心が持てた。<br>B　まあまあ興味・関心が持てた。<br>C　あまり興味・関心が持てなかった。<br>D　全く興味・関心が持てなかった。 | 行事終了後に実施したアンケートでは、Ａ＋Ｂの割合が９１％であった。 | 今年度は、理系クラスが北陸大学に出向き「生薬学」の講義を受けた。高校教育の範疇を超えた幅広い知識を得られたものと思う。<br>また、教職員に対しても、北陸大学の教授が本校に出向いて、大学生を相手にした模擬授業を実際にして頂き、学生への対応や発問の方法、教材の扱い方等大いに参考になった。 |

| | |
|---|---|
| 学校関係者評価委員会の評価 | ・職業や社会情勢等についての講演を聴く機会を与えるなどして、夢や目標を持たせ、学習意欲を喚起する必要がある。　・基礎的事項の徹底を図るために、中学校の教材を研究してはどうか。<br>・各教科の学習方法そのものを丁寧に教える必要がある。　・個別面談や三者懇談の機会を充実させる必要がある。　・読書の機会を増やすなどして、視野を広める活動を行う必要がある。 |
| 学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策 | ・個別懇談を充実させ、生徒に自分の未来について真剣に考える機会を与え、早期に高校生活の目標を持たせる。　・社会人等による講演会を開き、夢を持つきっかけ作りをする。・１年生は引き続き読書の時間の充実を図る。　・学習方法について各教科の担当者がより丁寧に説明する。　・中学校の教材研究を行い、習熟できていない部分については補充を行い、基礎基本の徹底を図る。 |

| 重点目標 | 具体的取組 | 達成度判断基準 | 集計結果 | 分析（成果と課題）および次年度の扱い（改善策等） |
|---|---|---|---|---|
| 2 望ましい生活習慣の確立<br>（通学マナーをはじめとする社会規範を守り、遅刻や欠席を減らし、登下校時等の挨拶を励行するなど、基本的生活習慣の確立を図る） | **基本的な生活習慣の確立と社会的規範意識の育成**<br>⑧ 定期的な通学指導を行い，通学マナーを身に付けさせる。 | バスの乗車マナーや自転車の通学マナーの状況について<br>A　非常に良い。<br>B　まあまあ良い。<br>C　あまり良くない。<br>D　良くない。 | 年度末に実施した生徒へのアンケートでは、A＋Bの割合が８９％であった。 | 通学マナーは少しづつではあるが、年々よくなっている。しかし、一部の生徒でもマナー違反は目立ってしまい、地域の方からお叱りを受けることもあった。特に、自転車のマナー違反は危険が伴うことが多く、繰り返し交通ルールの遵守を指導しなければならない。 |
| | ⑨ 家庭との連携を図りながら、服装、頭髪、化粧などの身だしなみ指導（生徒心得の遵守）を全職員で行う。 | 服装容儀において違反する生徒の数が全体の<br>A　ほとんど０％である。　B　５％以内である。<br>C　１０％以内である。　D　１０％以上である。 | 現状では、Bの５％以内であり、改善されてきている。 | 男子の長髪、女子のスカート丈の短いものが主な違反内容であるが、概ね改善されてきている。指導に差が出ないよう、教職員の協力体制の継続が必要である。 |
| | ⑩ 遅刻した生徒への日々の指導（多い生徒に家庭への連絡など）を通し，絶対遅刻しないという意識付けをし、基本的な生活習慣の確立を目指す。また、「遅刻防止週間」を毎月１回以 | 前年度に比べ遅刻数が半減したクラスが全体の<br>A　８割以上である。<br>B　６割以上である。<br>C　４割以上である。<br>D　４割未満である。 | 現時点での評価は Dである。<br>遅刻者総数は、昨年をやや下回る程度である。 | 判断基準の設定がクラス単位での半減としたため、厳しい評価をせざるを得ない。遅刻総数においても前年度の半減、また無遅刻日も年間５０日を目標として取り組んできたので、目標を達成することは出来なかった。<br>今年度の年間延べ人数は１２６３人（３月末現在）で、来年度も半減を目指したい。 |
| | ⑪ 登下校時や授業の始業・終業時等の挨拶の励行を図る。 | 登下校時等に積極的に挨拶をする生徒の割合が全体の<br>A　８割以上である。<br>B　６割以上である。<br>C　４割以上である。<br>D　４割未満である。 | 年度末に実施した教職員へのアンケートでは、８３％であった。 | 教職員に対しても、また本校への訪問者等に対しても、気持の良い挨拶が出来る生徒が多くなった。<br>来年度は数値目標としては、この８３％を少しでも上回ることを目標としたい。 |
| 学校関係者評価委員会の評価 | ・地域での生徒のマナーは良くなっている。<br>・生活習慣の乱れが遅刻の増加や学習意欲の減退につながる。健全な生活習慣の確立と学習意欲の高揚を図るため、遅刻防止の取組を継続的に行う必要がある。 | | | |
| 学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策 | ・引き続き遅刻防止の取組を重点的に行い、健全な生活習慣の確立に努める。 | | | |
| 3 心豊かな人間性の育成<br>（自主･自律の建学精神のもと、ボランティア精神や環境保護の精神を培い、地域社会から信頼される心豊かな人間性の育成を図る） | **地域連携と情報発信**<br>⑫ 地域と連携し、人間としての在り方・生き方の自覚を深める教育を実施する。 | 人としての在り方生き方について考えを深めることができたと感じる生徒が全体の<br>A　８０％以上である。<br>B　６０％以上８０％未満である。<br>C　４０％以上６０％未満である。<br>D　４０％未満である。 | 年度末に実施した生徒へのアンケートでは、５０％であった。 | 文部科学省の指定を受け、「在り方生き方教育」、「道徳教育」の推進に取り組んできたが、クラス単位のものが多く、全体へは浸透不足であった。道徳的な内容の授業を実施したクラスのアンケートでは、８割近くがそのねらいを理解してくれた。 |
| | ⑬ 地域の施設で奉仕活動を行う学校設定科目「ボランティア活動」を効果的に推進する。 | 単位修得を目指す生徒が対前年度(１０人)比<br>A　大幅に増加した。<br>B　やや増加した。<br>C　ほとんど変わらなかった。<br>D　減少した。 | 年度末に、「ボランティア活動」の単位取得者数を確認する。<br>現在１２名。 | 現在１２名であり、対前年度比やや増加したと言える。<br>単位取得にかかわらず生徒のボランティアへの意識は、年々高まって来ている。特に、昨年７月末の「浅野川の洪水」に際しては、夏季休業中にもかかわらず。延べ１００人近くの生徒が現場に出向き、精力的に救援活動を行った。 |
| | ⑭ 開かれた学校づくりを推進するため、カリヨンニュースやホームページを通し、積極的に情報を発信する。 | ホームページの内容の改善，更新が<br>A　適宜行われ、確実に情報が発信された。<br>B　ほぼ行われた。<br>C　やや滞ることがあった。<br>D　あまり行われなかった。 | ホームページ゛の更新は適宜行われているが、現在、全面的に検討中である。 | 必要、最小限度の更新は適宜行ってきたが、まだまだ発信量が不足している。また、ホームページをさらにわかりやすいバランスの取れたものにする必要があり、来年度も課題としたい。 |
| | ⑮ エコ活動を推進し、「学校版環境ＩＳＯ」の取得を目指す。 | 生徒・職員全体のエコ活動の取組は<br>A　非常に積極的であった。<br>B　概ね積極的であった。<br>C　やや消極的であった。<br>D　非常に消極的であった。 | 年度末に実施した教職員及び生徒へのアンケートでは、A＋Bの割合が９５％であった。 | 学校版環境ＩＳＯの認定を受け、学校全体としてのエコ活動を軌道に乗せることが出来た。 |
| 学校関係者評価委員会の評価 | ・評価項目の中に「どれだけ人間的な成長を成し遂げられたか」を加えてはどうか。　・社会に出れば人間関係をうまく構築する力が重要になる。人間力が備わるような指導が大切である。<br>・ボランティア活動は地道に継続的にやり、広報も積極的にやってもらいたい。　・普通コースにも何か特色ある取組がほしい。・普通コースをもっとＰＲする必要がある。 | | | |
| 学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策 | ・「どれだけ人間的な成長を成し遂げられたか」については、学校評価のアンケート項目に入れる。・特別活動等でよりよい人間関係を構築する活動を行う。<br>・ボランティア活動は、新しい取組も加えながら、継続的に行う。・ホームページを充実させ学校の諸活動のＰＲに努める。 | | | |

| 重点目標 | 具体的取組 | 達成度判断基準 | 集計結果 | 分析（成果と課題）および次年度の扱い（改善策等） |
|---|---|---|---|---|
| 4 部活動･生徒会活動等の活性化<br>（部活動･生徒会活動を通じ、たくましい心と体を培い、積極的で活力ある人間の育成を図る） | **部活動･生徒会活動等の活性化**<br>⑯ １年生には全員部活動に参加するように促し、部活動を活性化させると共に、全学年を通した体力の向上を目指す。 | 全生徒の加入率が<br>A　９０％以上である　　B　８０％以上である<br>C　７０％以上である　　D　７０％未満である | １０月に実施した調査では、８７％であった。 | 加入率については、ほぼ目標を達成できたといえるが、部活動の活性化が不十分であった。スクラップ＆ビルドの方針で部活動を精選し、活発な部活動に顧問を重点的に割り当て、部活動に参加しやすいよう放課後の会議を極力少なくするよう試みたが、効果が上がるまでに至らなかった。 |
| | | 男子１２分３０秒以内、女子７分３０秒以内の生徒が、<br>A　７０％以上である　　B　６０％以上である<br>C　５０％以上である　　D　５０％未満である | 男子は８１％、女子は６８％が目標タイムをクリアした。 | 「１校１プラン」の 取り組みとして昨年度から実施している。体力向上に役立つものとして、継続して実施してきているが、男子はタイム短縮を目標として精力的に取り組んでいるが、女子は２年生がやや消極的でタイムも伸びない。 |
| | ⑰ 地域に根ざした学校づくりを推進するため、生徒会が中心となりボランティア隊を組織し、ボランティア活動を奨励する。 | ボランティア活動への部員の参加率が<br>A　８０％以上である。　　B　７０％以上である。<br>C　６０％以上である。　　D　６０％未満である。 | 各活動実施後の調査では、９２％であった。 | 課外活動として定期試験の最終日や教育週間等に時間を設定して実施しているので、参加率も高く地域からも評価されている。 |
| | ⑱ 生徒一人ひとりが充実感・達成感をもてる生徒会行事を、企画・運営する。 | 行事終了後の感想として<br>A　充実感・達成感が大いにある。<br>B　充実感・達成感がある。<br>C　充実感・達成感がない。 | 行事終了後のアンケートでは、A＋Bの割合が８２％であった。 | 各行事に参加するほとんどの者が意欲的であり、したがって充実感や達成感を強く持っているものと思う。<br>本校の生徒会役員は執行委員も含め、各行事に大変積極的に取り組み好感が持てる。 |

| | |
|---|---|
| 学校関係者評価委員会の評価 | ・物事に自主的に取り組む機会を設け、積極性、自主性を身につけさせる必要がある。・ディスカッションや対話の機会を増やし、コミュニケーション能力を養ってもらいたい。<br>・各種検定試験や作文、絵画コンクール等を生徒に紹介し、チャレンジする機会を与え、その成果を外部にアピールしてはどうか。・部活動についてもっとＰＲする必要がある。 |
| 学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策 | ・部活動、生徒会活動を充実させ、積極性、自主性を身につけさせる。・各種検定試験や作文、絵画コンクールにチャレンジする機会を与える。<br>・ホームページ等で部活動についてもっとＰＲする。 |